《留学体験記》

維納回草子

新垣　春佳

ウィーンでの生活を始めて、すでに 7 ヶ月が過ぎていた。到着して間もない頃、プラーターの並木道には黄色や橙色の落ち葉に栗が入り混じっていた。今ではすっかり、陽の光を浴びた新緑がきらめく季節になっている。本当にあっという間の 7 ヶ月であった。留学直前までは就職活動に追われ、心身ともに研究がままならない状態だった。ドイツ語圏で留学していた先輩たちから冬季の日光不足による鬱の話を聞き、ドラッグストアでビタミン D のサプリメントを買いながら、ウィーンで 1 年間やっていけるのだろうかと不安を感じていた。だが現在、その頃の自分が理解できなくなるほどに、密度の濃い生活を送ることができている（残りの 5 ヶ月で状況は変わるかもしれないが）。結局、ビタミン D の存在はすっかり忘れたまま、日没は 20 時にまで延びていた。

大学にて

ウィーン大学でとりわけお世話になっている先生は、近代オーストリア女性史の Birgitta Bader-Zaar 教授だ。先生の授業では、20 人ほどの比較的小規模なクラスでハプスブルク史の政治、経済、社会など様々な方面での最新の先行研究を取り扱い、学生同士で議論するという二重に「アツい」内容だった。また先生は個人的な研究の相談にもご親切に乗ってくださり、アドバイスだけでなく、私の修士論文テーマに関係のある他の研究者の方も紹介してくださるなど、今でも様々な形で助けてもらっている。

家の周りで

11 月、自宅の近所でおじいさんが連れていた赤毛の柴犬に「可愛い」と呟いたことをきっかけに、週 1 回犬の散歩を一緒にする約束となった。仲良くなるうちに、おじいさんは自身の家族史について教えてくれた。祖先は現在のオーストリア地域に代々住んでいたが、第一次世界大戦での君主国の敗北を受け、南アメリカ大陸に活路を見出しコロンビアに移住したとのことだった。今まで机上で学んできた時代や地域の歴史を血の通った記憶としてもっているひとを目の前にしたときの興奮を今でも覚えている。また大学院の 1 年目に、私は前世紀転換期の白人女性の人身売買に関心があったため、彼女たちが「売られた」地域の一つ、南アメリカ大陸のドイツ系住民の生活も興味深く感じていた。そのため、おじいさんの話を伺ったとき、あのときの点がここでの出会いという点に繋がるのかと、感慨深いものもあった。私が引っ越したこともあり交流が途絶えてしまったが、あのおじいさんと、人間の言うことを全くきかない気の強い柴犬は元気にしてるだろうか。

歩きながら

ウィーン大学では、日本語科の学生と日本人留学生とのバディ制度がある。主に言語交換を目的とする制度だが、出会って 1 ヶ月も経たないうちに解消するペアがほとんどだそうだ。ただ私とバディの B は相性が良かったからか、たまに言い合いもするが、いつの間にかほとんど毎日会う仲になっていた。ウィーンで生まれ育った B は私の拙いドイツ語に付き合ってくれるだけでなく、ギムナジウムの頃からホロコーストの集合的記憶に興味をもっており、私にウィーン市内中の Denkmal（一般的な記念碑）から Mahnmal（動詞 mahnen「警告する」という意に由来する、負の記憶の忘却を警告するための記念碑）まで様々な碑を紹介してくれた。そのなかでとりわけ印象深い Mahnmal は、2000 年に Judenplatz（中世

のユダヤ人街が存在した地区）に建てられた鉄筋コンクリートの立方体だ。背表紙が裏返しになった積み重ねられた本の碑は、1938 年から 1945 年のホロコーストによって閉じられてしまった、約 65000 人のオーストリア・ユダヤ人の人生の物語を表している。もう決して開かれることのない本は、ホロコーストという歴史の不可逆性をまざまざと見る人に訴えかけていた。

ウィーンに来てからの趣味は、街中をあてもなく散歩し、19 世紀後半や 20 世紀前半に関する碑や建物を見つけることだった。こうした生活のなかで、ホロコースト以前はユダヤ人街として有名だった 2 区にかつて多く存在した、シナゴーグの跡地を巡る時間があった。1938 年 11 月ポグロム以前、ウィーンには合計 94 のシナゴーグと Bethäusern(シナゴーグとは違い独立した建物ではなく、2 階以上の建物の中にある宗教施設）があった。しかし現在、ウィーンのユダヤ教宗教施設は 1 区の Stadttempel を筆頭に、約 20 弱しかない。

まず、ウィーンの 11 月ポグロムにおけるシナゴーグの破壊の象徴でもある、Leopoldtstädter Tempel に向かった。このシナゴーグは、現在もそのきらびやかさで名高いブダペストのドハーニ・シナゴーグ Die Große Synagoge（現在も存続）と肩を並べたほどといわれる、ウィーンにおける壮麗なユダヤ教の祈りの場であった。現在、その跡地には、ポグロム以前の歴史を詳細に紹介する多くのプレートが見やすい位置に飾られており、またホロコーストの迫害の被害者とその子孫のカウンセリングを行うセンターも隣接している。またその周辺には、他の地区ではほとんど見かけない、伝統的な黒い衣装を纏った白髪のおじいさんや、紺や黒の長袖カーディガンと膝下のスカートで身を包んだ、10 代の女の子たちが和気藹々と歩いていた。今でもユダヤ系住民の生活が脈々と営まれていたことに、どこか不思議と安堵感を覚えた。

そこから 10 分ほど北西の方向へ歩き、11 月ポグロムで同時期に「抹消」されたシナゴーグ、Shiffsschul Tempel と Türkischer Tempel がかつて存在した場所に向かった。過去のユダヤ人の存在を偲ばせる痕跡は、四方 10cm ほどのプラスチックや真鍮の、当時の歴史を簡潔に紹介した無機質なプレートしかなく、人の目線より高い位置にあった。それは、先のシナゴーグ跡地のプレートや、ウィーンの歩道を歩くとふと目にするような「躓きの石」とは違い、意識しなければ見えない場所に飾られている。1938 年以前には約 20 万人のユダヤ系住民がいたウィーンではあるが、今は 10000 人弱しかいない。同地における、ユダヤ系住民のホロコースト前後での存在、そして記憶の隔絶を垣間見たような気がした。

しばらく歩いてから、Augarten（2 区にある広大なバロック様式の庭園）に辿り着き、その最寄りのバス停に向かった。ふと、そばにある公園の中のバスケットボール・コートが目に入った。コート内では、キッパを被り白黒の長袖上下にツィーツィートをぶら下げた子供たちが、アディダスやナイキの色とりどりのジャージを着た子どもたちとボールを追いかけ回していた。見ていると、どうやら両者混合のチームで遊んでいるようだった。彼らのなかで、過去の記憶はどのように紡がれていくのだろうか。

ガザ危機をきっかけに、世界各地で反ユダヤ主義の気運が表出し始めた。ウィーンも例外ではない。しかし少なくとも、全てが悪い方向に進むことはないのではないだろうか。たくさんの色が走るコートを見て、そのような思いが浮かんだ。

おわりに

ここまで駄文にお付き合いくださった方ならお分かりくださるように、私は大学のクラスの中でよりも、現地で出会った人々との交流や実際に街に繰り出すことによって、近代ウィーン史の面白さを再発見していった。卒業論文では、前世紀転換期ウィーンの公共圏と反ユダヤ主義の関係について書いた。大学院ではウィーンから離れて、20 世紀前半のオーストリアで起きた白人奴隷問題や、はたまたナチスの T4 作戦など四方八方に目を奪われていた。しかし留学をきっかけに、自分が一貫して「面白い」と感じ、今後も考えていきたいこと何なのか、はっきりと確かめることができた。

それはユダヤ人をめぐる近代社会の様相であり、ウィーンという都市そのものだった。修士論文のテーマは、両大戦間期のウィーンの反ユダヤ主義に決まった。都市の中心を囲む円環道路リンクシュトラーセ沿いの建築物に夢中になって歩いているといつの間にか一周し終わっているように、どうやら私は気づかないうちに原点に辿り着いていた。

（京都大学大学院修士課程）